

# Book Review

## 顎関節症のリハビリトレーニング よく動く関節は痛くない！

木野孔司 編著／佐藤文明・澤田真人・渋谷寿久・澁谷智明・  
西山 暁・羽毛田 匡・儀武啓幸 著



Reviewer

小林 馨 Kaoru Kobayashi

(鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座)

A4 判変, 140 頁  
オールカラー  
定価 (本体 7,800 円+税)  
医歯薬出版刊



本書は、顎関節症による開口障害、顎関節痛、咀嚼筋痛に対する診療について最良の書の一つであり、臨床に即した内容である。

CHAPTER I ではこれまでの顎関節治療の変遷が記載されている。読者は、自分が顎関節診療を学んだ時期によって治療方法が異なることを改めて振り返ることで、これまでに感じてきた知識の矛盾を解決できると思う。

特に重要なのは CHAPTER II で、本書で提唱されているリハビリトレーニング（関節可動化訓練治療）の有効性についてのエビデンスが示されている点である。開口障害、顎関節痛ならびの咀嚼筋痛への効果はわかりやすく示され、無痛最大開口距離の8週の経時変化のグラフは診療のよい指標になるだろう。

そして CHAPTER III ではそのコンセプトが示されている。読者は CHAPTER III-2 の急性期と慢性期の診療の違いをよく理解しておくとも日常臨床への導入がしやすいと思う。COLUMN 2 「タスマニアデビルの顎関節には関節円板がない」は楽しく読ませていただいた。

CHAPTER IV では診断の重要性と診査について記載されている。本書は通常の病態、理論背景、診査、診断、治療という流れに対し、変遷、エビデンス、コンセプト、診査診断という順になっているが、診断が重要なことは言うまでもなく適切に記載されている。

また、COLUMN 3 では、新しく開発された下顎頭前方滑走運動を誘導する開口訓練器が紹介されている。本書のコンセプトと診療方針に合致した器具として今後の普及に期待すると同時に私も取り入れてみたいと思う。ここではスプリント治療についても記載されており、経験の少ない方でも抵抗なく実施できると思う。

そして、CHAPTER V ではリハビリトレーニングの実際へと進んでいく。ここではこれまで述べられてこなかった関節円板復位訓練が記載されており、初期のクリック例に対する対応が示されている。関節音に対する対処法は若年の患者には必要な方法である。ただし、復位性顎関節円板障害を MRI で確定することが必要である。ここではさまざまなりハビリトレーニングのバリエーションが記載されている。私

も著者らとの交流があり、以前から同様の治療法を取り入れており、その治療効果には同様のデータと意見をもっている（ただし、木野氏の表現に倣うなら、本書より強力でない開口練習である）。しかし、これほどのバリエーションを使用していない、初めてリハビリトレーニングに取り組む方には、関節可動化訓練と関節円板復位訓練から取り組むのがよいと思う。

このとき、本書で記述されているとおり患者サポートは不可欠である。また食事指導が取り入れられたのも本書の特徴である。なかでも開口障害が生じている非復位性顎関節円板前方転位症例に対する食事指導が取り入れられたのは、画期的なことだと思う。そして治療のゴールは、強制開口でも痛みが出なくなる点である点も明記され、本法を導入する歯科医師に不安を与えない。この後に CHAPTER VI 「実施例」、CHAPTER VII 「患者さんからの疑問に答える」、診査表等の付録と続いている。同様の診療を行っている私の視点だからかもしれないが、本書はよい構成であり、患者さんへの対応を強力に支える一冊である。